

巻頭言



正しい認識の普及を

尾関 雅 則

日本にコンピュータが、出現してから十数年、いまや世界第二のコンピュータ保有国といわれていますが、本当にそれだけの実力が、身についているのでしょうか。なるほど保有台数においては、そのとおりかもしれません。しかし、それとても第1位との差は、ほぼひとけたの違いがありますし、コンピュータの使われ方においては、どうでしょうか。日本におけるトップクラスのシステムは、世界のどのシステムと比較してもひけをとらないものもありますが、全体的にながめると、まだまだ相当の懸隔が感ぜられます。

このへだたりを縮めてゆくために、最も大切なことは、コンピュータのもつ機能および特質に関する正しい認識であると思います。日本において、コンピュータに関する知識が社会的な関心事となったのはまだこの数年來のことであって、とても正しい認識が社会的に浸透し定着していることは考えられません。

コンピュータを手掛けている専門家はいざしらず、一般の社会人は、世間において相当な地位にあって、各方面で活躍されておられる方々を含めて、まだまだ“一体、コンピュータとは何か、コンピュータに可能なこと、不可能なことは、何と何か”といった基本的な、認識を正確に身につけるに至っていないと思われる。

それは、コンピュータの発展が非常に急激であって、一種のブームの様相を帯びてきていたことと、その啓蒙活動がかならずしも正しく行なわれてきていなかったことに、原因があると思われる。さらにまたコンピュータは、従来の機械と違って、その使い方に利用技術という、言葉が生れるほど、その利用方法がわかりにくく、従来からあったモータや自動車のように、常識でわかるようになっていないことも大きな理由でしょう。

現在、世間一般のコンピュータに対する平均的認識は大きく分けて、次の2種類になると思います。その一つは、コンピュータ過信論ともいうべきものであり、コンピュータは万能で、丁度アラジンの魔法のランプか、空飛ぶ絨緞のような受け取り方があります。

他の一つは、これと反対にコンピュータ不信論ともいうべきもので、情報公害をまき散らす悪魔であるといった見かたからはじまって、大きな算盤であって所詮大したことはできはしないというような考え方まであり、全く千差万別、群盲撫象の感じであります。

この現象は除々に正されて行かなければならないものでありますが、このような状況をもたらした責任者として、ひところまでのコンピュータジャーナリズムをあげつらうだけでなく、われわれコンピュータ関係者も卒直に反省しなければならないであります。

コンピュータにできることを、最も簡単に表現すれば次の四つの機能に集約されるでしょう。すなわち、それらは四則演算、比較、記憶、データの移動であります。

コンピュータにできることはこの四つだけではありません。そしてこの四つの機能は、きわめて速く絶対正確である。というのがコンピュータの特性であってそれ以上でもなければそれ以下でもないのです。

ところで、われわれ人間がコンピュータに何にかの仕事をやらせようとする場合、その中味を上記の四つの機能にまで分解して、それを矛盾なく順番に行なわせるような論理のもとに、命令のシーケンスを組立てなければなりません。これをコンピュータの命令語で表現したのがプログラムであります。

コンピュータシステムを開発して行く場合に、一番多くの手数と時間がかかるのは、実は何をやらせるかをはっきりして、これを四つの機能を示す言語だけで表現することです。しかもコンピュータに行なわせる仕事が、システムライフの中でどのように発展して行くかを考えて、稼働開始の当初だけでなく将来必要となるであろうことも可能になるような論理のからくりを当初から内蔵させておかなければならないところに、この仕事のむずかしさとおもしろさがあると思います。システム開発のこのような面が、世間の常識として、深く浸透し沈潜したときにこそ、初めて本当の情報化時代がくるのではないでしょう。